



【今はバルナバが必要な時代です。】

2013年3月13日 主日礼拝説教

今日の聖書本文:使徒の働き 9:26-31/暗唱聖句; ヨハネの福音書 12:24

説教者: 鄭南哲牧師

(Rev.Jung nam-chul)

聖書的に言う時、偉大な指導者、すばらしい指導者像は決して自分が成功する指導者ではありません。聖書が言っている偉大な指導者はほかの人を成功させる指導者です。それを聖書的な概念で言うと“仕える人”です。つまり、しもべのようにほかの人に仕える指導者を言います。私はいまの時代に一番切実に必要とされるのがこのような指導者だと思います。今日は聖書に出てくる代表的な一人の指導者を考えて見たいと思います。その人の名前はバルナバです。いまの我々の社会と時代が要求する指導者はバルナバのような人ではないかと思ひます。

<1. バルナバはだれでしょうか?>

彼は誰でしたか。今日の本文を含めて使徒の働きの何箇所からバルナバについて記されていますが、バルナバに対する最初の紹介は使徒の働き 4章に記録されています。

“キプロス生まれのレビ人で、使徒たちによってバルナバ(訳すと、慰めの子)と呼ばれていたヨセフも、畑を持っていたので、それを売り、その代金を持ってきて、使徒たちの足もとに置いた。”(使徒4:36-37)

まず、この人の本名はヨセフです。おそらく彼の親は自分の息子がヨセフのような人になってほしい願いを込めてヨセフと名づけたと思います。彼の出身地はキプロスだと記されています。そこは小アジア近辺のサイプロスーという島です。パウロの当時初代教会の時はキプロスはとっても裕福な都市として有名だったそうです。鉱山があり、イチジクと麦の農作が豊作で、オイルとハチミツの産地でした。そういうわけでキプロス出身だと言われると‘金持ちである’と思われざるほどキプロスは豊富な資源を持っていた都市でした。このキプロス出身のバルナバはおそらく相当の財産持ちの家門に違いないと想像できます。彼はきっと五旬節の聖霊降臨の時にクリスチャンになった可能性が高く見られています。そして、教会に加わって、信仰生活をする中で、あだ名をつけられますが、それがバルナバでした。ある意味、あだ名は親によってつけられた名前よりもっと自分の特徴がよく表されていると思います。みなさんのあだ名はなんでしょうか。あだ名には自分の特徴や自分が良く表されていると言えるでしょう。

すると、バルナバというあだ名の意味は何だったのでしょうか。使徒の働き 4章には(慰めの子)だと書かれています。つまり、彼は励ましの子として多くの人々を慰め、励まし役だったことがわかります。人々は彼に会うと人生の勇気を得ます。新しい力を得ます。そういうわけで人々は彼のあだ名をMR慰め、MR励まし。と名づけてあげたのではないかと思います。バルナバという名前を通して彼は励ましの人であったことがわかります。

使徒の働き 4章37節によると彼はどんなことをしますか。自分にあった畑を売って、その代金を使徒たちに献金したわけです。初代教会はどんどん大きくなっていくいっぽでした。多くの人々が次々と救われます。やることもたくさん増えました。教会に必要とされる献金も、救済するためにもたくさんの献金が必要でした。このような困難な時に教会の指導者たちが話し合う時、自分の財産を売ってまで献金したバルナバの献身は教会にとってどれだけ大きな励ましだったのでしょうか。

“このように使って下さい。”と指定したわけでもありません。つまり、自分の思う通りに使ってほしいとおもって出した献金はまだ自分のお金です。教会に必要とされるまま、神様の御用のため、それが使われるべきです。教会の必要をみてためらわず、何の条件もなく自分の畑をささげたこのバルナバの献身は神のビジョンに向って成長していく初代教会と信徒たちにどれだけ大きな励ましと勇気と力になったのでしょうか。慰めの子、励まし者というあだ名はこの人にふさわしいのに違いないと思います。

<2. バルナバはどんな人でしたか。>

次は、パウロとの関係をとおしてバルナバの人間性を知ることができます。使徒の働き9章はサウロの改心の出来事とその後に起こった内容です。サウロがダマスコの道でイエスに出会ってからパウロになります。彼がクリスチャンになったのです。そしてパウロはどんな行動をとりますか。使徒の働き9章26節です。

“サウロはエルサレムに着いて、弟子たちの仲間にはいろいろと試みたが、みなは彼を弟子だとは信じないで、恐れていた。”

彼は最初の教会だったエルサレム共同体に行ってほかのクリスチャンたちと交わりたがりました。パウロもクリスチャンになったので、ほかのクリスチャンたちと交わりたがるのも当然です。しかし、エルサレム教会の信徒たちの反応はどうでしたか。以前のパウロに対する先入観のためみな警戒し、恐れていました。そして彼が弟子になったことも信じないで、疑っていたわけです。事実、このような反応は当然だとも思われます。なぜなら、パウロはクリスチャンになる前、どんな人でしたか。

使徒の働き 9章1-2節で、以前パウロはクリスチャンに会うたびに逮捕して牢屋に入れる残酷な迫害者でした。なのに、いきなりある日、教会に現われて‘私もクリスチャンになりました。私ももう変わりました。’と証する人を受け入れることはすぐにできなかったはず。そういうわけですから、パウロがクリスチャンになったのにもかかわらず、教会共同体に受け入れられず、むしろいじめられ、さびしく苦しんでいる時にだれが登場しますか。そこにバルナバがいきました。

そしてバルナバがしたことは何ですか。パウロに対する身分保証人になったのです。(使徒の働き9:27)

“みなさん、本当です。私が保証します。この人パウロは本当のクリスチャンになりました。ダマスコで生きておられるイエス様に会ったのは事実です。彼は変えられ、イエスに出会ってからすでに福音を宣べ伝えています。彼がまことにクリスチャンになったのを私が保証します。”

みなさん、誰かに対して自分のすべてをかけて、責任をおって、身分を保証することは決して簡単なことではありません。これによってほかの人々から逆にいじめられたかもしれません。バルナバもパウロとぐるだと誤解されののしられたかもしれません。しかし、バルナバは自分が損することも、大変な目にあう事さえも覚悟したうえで、パウロのために彼を代弁し、保証人になったのです。

それでどうなりますか。28節をみると“それからサウロは、エルサレムで弟子たちとともにいて自由に出入りし、主の御名によって大胆に語った。”バルナバの代弁を通してパウロは弟子たちと一緒に交わることができたのです。初代教会の正式メンバーとして大胆に信仰の生活が始まったのです。

パウロはバルナバによって主の福音のために用いられ始めました。パウロがキリスト教共同体においてイエス・キリストの弟子として受け入れられ、福音のために働いた背後には彼を信頼してくれた人、彼の可能性を信じて立たせてくれた人バルナバがいたことを私達も忘れてはいけません。つまり、バルナバがいなかったら、伝道者パウロもいません。みなさんはいままで、だれかを自分のもっていた先入観のため批判する側に立っていましたか。それとも守り、立たせる側に立っていましたか。私達もほかの人に対して深い事情を分かっているのに表と先入観だけで勝手に判断したり、批判することがあっては絶対いけないと思います。

愛するみなさん、慰めの人のバルナバが我々の教会にも必要ではありませんか。バルナバがいなかったため多くの可能性のある人々が結局落胆し、傷つけられ、さらに教会を離れてしまう場合がどれだけ多くあるのでしょうか。神様のために彼らの夢を飛ばたく前に、彼らのビジョンを開く前に折れてしまう場合は少なくないと思います。

100年前、その人は神学を勉強していた神学生でした。情熱をもって彼は献身し、一生懸命教会の奉仕をします。そして貧しい人々に訪ね、伝道に熱心でした。オランダ出身の彼はロンドンで絵を売る会社に勤めていました。そして、彼が通っていた教会はそんなに良い教会ではありませんでした。はじめての説教に対してへたであることは当然なのにもかかわらず、教会の人々は彼の説教に対してむやみに批判しました。否定的で批判的な人々が多かったこの教会はこの若者を立たせることができなかつたのです。彼は結局そこで挫折してしまいます。人々はしきりにほかの仕事を見つけるようにと言われ、彼はほかの仕事をすることにします。ほぼ信仰をも失われてしまう危機でした。しかし、信仰はあきらめませんでした。彼は絵を描き始めます。それで彼は世界的な画家になりました。その人が**ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ(Vincent van Gogh)**です。ところが、このゴッホの伝記にこのような興味深い記録があります。

“この人が持っていた情熱と想像力をみると、彼がもし伝道者として献身したなら、世界で偉大な説教者になる可能性があったはずだ。人類は偉大な画家を得たが、偉大な説教者は失った。”結局彼は37歳に自殺してしまいました。

一人の励ましと人を立たせる姿こそが我々の教会と家庭、そしてこの社会にどんなにすばらしい指導者を立たせることができるのかその可能性を考えたことがありますか。神様の御前で私達はバルナバのような役割を果しているのでしょうか。我々の教会にもバルナバのような人がたくさん増えますようお祈り申し上げます。

<3. 主の教会をまず考えた本当のリーダーバルナバ>

主の福音がユダヤ人を越えてギリシャ人にも福音が伝えられるとまずアンテオケという都市でクリスチャンが多く増えます。使徒の働き11章21節です。“主の御手が彼らとともにあったので、大勢の人が信じて主に立ち返った。”

11章22節をみるとエルサレム教会がバルナバをアンテオケに遣わします。このアンテオケに素晴らしい教会が立たされるという可能性があるのと彼らは判断し、このために指導者であるバルナバを派遣(はけん)したわけです。続けて11章23節をみると、アンテオケに行ったバルナバはアンテオケ教会を立て上げ、信徒たちが主を固く信じるようにと、一生懸命牧会をするわけです。“みなさん、このイエス・キリストを信頼して下さい。イエス様は我々の主です。主は我々の希望であり、救い主です。キリストに拠り頼みましょう。”その結果どうになりましたか。

“彼はりっぱな人物で、聖霊と信仰に満ちている人であった。こうして、大ぜいの人々が主に導かれた。”(使徒11:24)

多くの人々がアンテオケ教会に入ってきました。教会は成長し続け、毎週多くの人々が教会に入ってきました。とうとうバルナバ先生はこの時代のヒーローになれるチャンスでした。教会を立て上げ、多くの人々が主を信じ、教会に入ってきて、多くの人々に賞賛され、みとめられています。なのに、ここで、バルナバはおもしろいことを考えています。

“バルナバはサウロを探してタルソへ行き”(使徒11:25)

教会が大きくなっていくときバルナバはパウロを考えました。信徒たちも増え、やることも多くなっています。

‘こんな時、パウロがいたならな。その人なら私とともにすばらしく働きができるのに。。。いや、むしろ、私よりもっとすばらしく働きができるかも。自分の能力には限界がある。しかし、パウロはこの人たちを育ててイエス・キリストの偉大な弟子たちをたくさん作ることができるすばらしい可能性を持っている人だ。パウロはこのごろ何をしているのか。?’と思っていたバルナバはパウロを探しにタルソへ行ってパウロと一緒にアンテオケに戻ってきます。二人は教会で1年間くらい大きな群れを牧会したのです。要するにチームの働きをしたのです。一人ではなく、ともに働いたわ

けです。それだけではなくいろんな人たちがともに働いたのです。愛するみなさん、バルナバは一人ですべてができると思いませんでした。ともに働く大切さを知っていたのです。そして喜んで、ほかの人を立たせることをも知っていたのです。

このバルナバという人の歩みを研究しながら彼について二つに要約することができます。

一つ目、バルナバは自分を知っていた人でした。 そういうわけで神様の御前で自分がやれることとできないことをよく分かっていました。彼はやれることを探して心を尽くして働きました。教会において一番大切な必要はなにか。神様の働きのためにはどれだけの財源が必要なのかについて考えました。そういうわけで、彼は自分の財産の一部を惜しみなく主にささげることができたのです。彼はサウロという一人の青年が入ったとき、その青年の可能性を信じて「私がこの人を顧みてあげよう。この人のサポータになろう。」と考えました。みんなが彼を疑うとき、彼の後見人（こうけんにん）になって、彼を支え、立たせてあげたバルナバは自分のやれることをしたのです。

同時に彼は自分の限界を良く知っていて認める人でした。アンテオケ教会にリバイバルが起こった時彼は、「私、一人ではできないのだ。ともに働く人が必要なのだ。」と思ってパウロに働きをまかせます。そして、ともに働きます。アンテオケ教会はバルナバの限界を越えてパウロとともにさらなる神様の働きに力を発揮することができるようになりました。

二つ目、バルナバは大きく完成された絵を見ることができた人でした。

もし、バルナバが自分だけ考えていた人だったのなら、パウロという人を危険なライバルとして思った可能性が高いでしょう。パウロが来たら、アンテオケ教会での自分の立場があやふやになり、自分の牧師の座から追い出されるかも知れないと思った可能性もあります。しかし、バルナバはそうのように考えませんでした。彼は大きく絵を見ました。主の教会という絵をみました。イエス・キリストの教会、神の御国を考えました。御国のために、キリストの教会のために有益なら、パウロのために、私が仕える人になってあげようと考えました。自分をおろし、自分を隠しながらほかの人を立たせ、キリストの福音の有益のため喜んで自分をささげる準備ができたいた人、その人がバルナバでした。

実際に、使徒の働きを読みながらおもしろい点を見つけましたが、使徒の働き11章と12章にはバルナバとパウロ順に書かれていますが、これは使徒の働き13:7まで続きます。ところが使徒の働き13:43からはその順序が逆になって、パウロとバルナバとなります。それからはパウロとバルナバです。後には実際にもっと影響力のある指導者としてパウロが登場されます。

みなさん、この時バルナバはどんな気持ちだったのでしょうか。もちろん、聖書にその記録はありません。しかし、私は疑いなくこのように思います。パウロが影響を与える指導者として上がってから人々はバルナバよりはパウロを探したと思います。自分が立たせたパウロが偉大な指導者になっていくことをながめながら、バルナバはむしろ感激し、神様に感謝をささげたと思います。“神様、この足りない者をとおしてパウロを立ててくださった神様をほめたたえます。”パウロをたたせた後、主に栄光を帰しながら、舞台のうしろに身を隠すことができたりっぱな神の指導者、その名がバルナバです。彼にとって一番の座、最後の座は誰が取るかは気になりませんでした。自分がしんがりになって主の御名があがめられ、神様に栄光を帰することができるなら自分の職位と立場は何もありませんでした。

この大きい絵をみた人、このすばらしいバルナバがいまの時代にも必要だと思いませんか。私たちの家庭にも必要ではありませんか。主の教会は地位意識を気をつけなければなりません。役員、そして、今年たたされる執事の職分はほかの人の上の階級ではありません。もっと献身し仕えるべき職分を階級で勘違いしてはいけません。そうすると、主の教会は墮落し始めます。いまは大きい絵をみななければなりません。家庭を生かし、国を生かし、教会を生かし、我々の民族を生かす人、御国のために役に立つものになるためには、もっと多くの人を立たせるために、そして神の栄光を表すために自分を犠牲の場に仕える場に投げる人が必要です。その人はどこにいますか。そのようなバルナバはどこにいますか。このような人の代表は我々の救い主なるイエスキリストではないかと思えます。悲劇の十字架の死を目の前にして言われたイエス様の御言葉を忘れないで下さい。

“まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのみ実です。

しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。” (ヨハネ12:24)

多くの人々を救うために自分を十字架にあげわたしたイエス様、みなさんと私とそのイエス様に従う弟子であるなら、我々は家庭内で、教会内でどんな態度をとるべきでしょうか。いまはバルナバを必要としている時です。まことの主の弟子を必要としている時であると信じます。

バルナバのようになり、バルナバのように用いられる祝福がみなさんにもありますようお祈りします。年を重ねていくほど、信仰が成熟し、成長してバルナバのような人が多くなるクリスチャンプレイズとなりますよう主イエス・キリストの御名によって祝福します。アーメン!